

松 山 大 学 論 集  
第 32 卷 第 4 号 抜 刷  
2 0 2 0 年 10 月 発 行

## 『クリスマス・キャロル』再考

—— スクルージは完全に冷酷で嫌われているのか ——

角 田 裕 子

# 『クリスマス・キャロル』再考

—— スクルージは完全に冷酷で嫌われているのか ——

角 田 裕 子

## はじめに

本稿の目的は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『クリスマス・キャロル』 (*A Christmas Carol*, 1843, 以下『キャロル』と略記) の主人公エベニーザー・スクルージ (Ebenezer Scrooge) の特質を明らかにすることである。とりわけ改心前のスクルージに注目し、冷酷で嫌われ者とされる人物像に異なる角度から焦点をあてる。あらかじめ結論を述べるなら、本稿の主張は、改心前のスクルージは完全に冷酷で嫌われているわけではないということだ。この結論を導くためにまず、前提として、改心前のスクルージが確かに冷酷ではあることを彼の言動から確認する。次いで、しかしながら、冷酷でありながらもそのように断言できない一面がスクルージにあることを指摘する。そしてそれをもとに、スクルージに対する脇役の態度とその周囲の状況に注目し、彼の人物評価が嫌悪で統一されていないことを過去、現在、未来のクリスマスの幽霊との交流の場面を通して明らかにする。

## 1. スクルージは完全に冷酷なのか

スクルージの冷酷さは『キャロル』冒頭近くで示されている。語り手はまずスクルージの特徴を「けち」“a tight-fisted hand at the grindstone” (10) で「強欲な老人」“a . . . covetous, old sinner!” (10) と断言し、内面の冷たさが外見に表れていることを “The cold within him froze his old features, nipped his

pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin.” (10) で示す<sup>2)</sup>ここで語り手は“cold” (10), “froze” (10), “frosty rime” (10)といった感覚に直接訴える言葉, そして“pointed” (10) や“wiry” (10) のような無機質さを連想させる言葉の使用により, いかにスクルージが冷たいかを強調している。その結果として, 読者はスクルージの冷酷さを印象付けられ, その印象は, 語り手が挙げるスクルージへの世間の態度, つまり人々がわざとスクルージから距離を置き, 盲導犬までが彼を避けるという例により確かなものとなる。

スクルージの冷酷さが最も端的に表れるのは寄付金を募る紳士への言葉だろう。クリスマスだからこそ貧困者に喜びを与えようとする紳士に対し, スクルージは即座に“Are there no prisons?” (13), “And the Union workhouses?” (14) と畳み掛けて質問する。そして貧困者の中には救貧院へ入るくらいなら死を望む人間がいることを聞いたスクルージは“If they would rather die . . . they had better do it, and decrease the surplus population.” (14) と即答する。これは彼が冷酷であると解釈できる象徴的な言葉だ。後に, 改心しつつあるスクルージは現在のクリスマスの幽霊 (the Ghost of Christmas Present) が連れた「無知」“Ignorance” (62) と「貧困」“Want” (62) の子供達に救済があるか幽霊に尋ねると, 全く同じ言葉“Are there no prisons?” (64) を返される。この場面は, 改心前のスクルージが助けを必要とする人間を完全に無視し, そしてその態度こそが彼を冷酷と解釈させる根拠になることを示す。このように改心前の言葉を改心の途上にある場面でそのまま使うことは, 彼の冷酷さを際立たせるのに非常に有効であり, 冷酷なスクルージ像は決定的となる。

しかし, そのような改心前のスクルージを完全な冷血漢と断言するには慎重になる必要があるだろう。それはスクルージ自身が雇う書記ボブ・クラチット (Bob Cratchit) への彼の態度を例として挙げることができる。注目すべきことに, スクルージはクリスマス当日にボブへ休日を与えている。しかも毎年与え,

その分の給料もきちんと払っていることが “A poor excuse for picking a man’s pocket every twenty-fifth of December!” (16) から分かる。もちろん、スクルージはこのようなことを心から喜んで行わない。年一回の唯一の休日だとするボブの主張を “A poor excuse” (16) とし, “. . . you don’t think *me* ill-used, when I pay a day’s wages for no work.” (16) と話すスクルージはむしろ自分を被害者と考えている。だがここで明らかになることは、他人の痛みを理解しないけちで強欲なスクルージが、わずか年一回にせよ休日を与え、実態の無い労働に対して給料を払うという不自然さなのだ。この言わばスクルージの親切な行為は、語り手が示す彼の特徴、つまり “squeezing” (10), “wrenching” (10), “grasping” (10), “scraping” (10), “clutching” (10) と相容れない。普段は力づくで全てを手に入れ、クリスマス当日のみは見返り無しで与える行為をする。これこそスクルージの重要な矛盾点であり、彼を完全な冷血漢と考えるには疑問符が付く。

このように、スクルージの冷酷さは語り手による説明や彼の他人への言動で強烈に示されている。しかしスクルージの言動には冷酷さと彼にとっての親切さが共存しているので、彼が完全に冷酷であるとは断言できないだろう。もしスクルージが完全に冷酷ならば、そもそもボブへ休日を与えず、ましてや勤務実態の無い労働へ給料を払うはずがない。語り手が示すスクルージ像とボブに接するスクルージ像にはいくらかの差異があるのだ。

## 2. スクルージは完全に嫌われているのか

改心前のスクルージが完全に冷血漢であると断言するには疑問符がつくが、冷酷であること自体は間違い無い。それは語り手の説明や彼の言動のみならず、脇役の反応からも明らかだ。例えば、ボブの妻 (Mrs. Cratchit) はスクルージを “an odious, stingy, hard, unfeeling man” (53), そして彼に借金をしている男は、未来のクリスマスの幽霊 (the Ghost of Christmas Yet To Come) が見せる場面で、彼を “so merciless a creditor” (72) と言う。ボブの妻の言葉からは、

安い給料のため生活が楽にならないことへの不満、そして借金を抱える男の言葉からは、スクルージの情け容赦の無い取り立てに疲弊する様子が滲み出ている。加えて、“unfeeling” (53), “merciless” (72) という言葉から、彼らがスクルージを冷酷と考えているだけでなく、嫌っていることも推測できる。このように、スクルージが冷酷であることは語り手、彼自身の言動、そして脇役の三つの視点から確実となり、読者はそのことに疑問を抱かず、また彼が嫌われていることにも納得するだろう。

しかし注目すべきことに、脇役全員がスクルージを嫌っているわけではない。この点については、ボブとスクルージの甥フレッド (Fred) に著しい。彼らがスクルージを冷酷と考えながらも嫌っていないことは、スクルージ像の理解に不可欠な観点である。本章ではスクルージへのボブとフレッドの態度に注目し、『キャロル』がスクルージ嫌悪で統一されていないことを明らかにする。

## 2.1. ボブはなぜスクルージを非難しないのか

ボブがスクルージを嫌っていない根拠は、彼を全く非難しないということである。これはボブの家族、とりわけ彼の妻のスクルージへの非難に対するボブの反応から明らかだ。現在のクリスマスの幽霊が見せる場面で、クラチット家はクリスマスディナーを楽しむ。その場面で、ボブは“Mr. Scrooge! . . . I'll give you Mr. Scrooge, the Founder of the Feast!” (53)とスクルージを祝福する。一方、ボブの妻は“The Founder of the Feast indeed! . . . I wish I had him here. I'd give him a piece of my mind to feast upon, and I hope he'd have a good appetite for it.” (53)とスクルージへの怒りを子供達の目の前で率直に表す。この怒りは、ボブの妻が普段から抱くスクルージへの不満を表す。“appetite” (53) は、もちろん“feast” (53) そのものに対する言葉だが、その中にスクルージの強欲さも含むことは言うまでもない。しかし、その非難に対し、ボブは“My dear . . . the children! Christmas Day.” (53)と子供達の目の前であるこ

とを窺めるだけで、非難自体については妻に一切同意しない。しかもこの口調は“mild answer” (53) であると語り手が示すことから、ボブが妻とは異なり決して感情的になっていないことも分かる。このようにボブは妻がどれだけスクールジを非難しようとも決して同意しない。では、ボブはなぜそこまでスクールジを非難しないのか。

この疑問に対しては、次のような答えを仮説として提示することができる。ボブはスクールジを嫌な人間として考えていないということだ。しかし、ボブがスクールジをどのように考えているのかについて、彼自身、または語り手が実際に言及している箇所は『キャロル』に存在しない。そのため、この仮説は可能性の範囲にとどまるものとして、以下に根拠を示す。

ボブのスクールジに対する考え方は直接言及されていないが、彼の人間に対する根本的な考え方は推測可能だ。それはフレッドがクリスマスについて、彼自身の考えをスクールジに話した時のボブの反応に表れている。フレッドは“the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys.” (12) と彼自身の考えを示し、それを聞いたボブは称賛する。このフレッドの考えは、要約すると、性別や階級を問わず、あらゆる全ての人間を同じ“fellow-passengers to the grave” (12) と考えるということである。語り手はフレッドの考えを聞いたボブの様子を“The clerk in the tank involuntarily applauded.” (12) と言うが、注目すべきことは、ボブが“involuntarily” (12) に称賛していることだ。ボブが思わず称賛するということは、つまり彼がまさに考えていることをそのままフレッドが代弁したということになる。そのため、フレッドとボブの考えは一致すると断言しても問題無いだろう。このように、ボブはどんな人間でも“fellow-passengers to the grave” (12)、つまり人生の仲間と根本的に考えていると思われる。では、人間を人生の仲間と捉えているであろうボブはスクールジをどのように考えているのか。

これは『キャロル』で直接言及されない問題だが、彼の人間への根本的な考え方をもとに推測してみよう。

ボブはスクルージをクラチット家に幸せをもたらす人物と考えているのではないだろうか。これは、彼の“Mr. Scrooge! . . . I'll give you Mr. Scrooge, the Founder of the Feast!” (53) という言葉に示されている。この言葉はボブが妻から顰蹙を買うものだが、実は彼がスクルージについて直接言及する唯一のものである。現在のクリスマスの幽霊が見せる場面の中心は、普段は貧困にあえぎながらも、クリスマスの時のみ陽気になり、賑やかに過ごす貧しい人間達だ。彼らは家族を愛し、家族に愛され、お互いに感謝し合い、固い絆で結ばれている。つまり、そこは打算とは無縁の世界である。もちろんこの様子はクラチット家にも当てはまり、語り手が“. . . they were happy, grateful, pleased with one another, and contented with the time. . .” (54) と示すことにより、彼らの幸せが強調されている。しかしここで重要なことは、ボブの感謝は語り手の言葉が示すような家族に対してのみならず、スクルージにも向けられていることだ。それはボブが“A Merry Christmas to us all, my dears. God bless us!” (52) と神に祈った後、すぐに続けて“Mr. Scrooge! . . . I'll give you Mr. Scrooge, the Founder of the Feast!” (53) とスクルージを祝福することから明らかである。つまり、ボブにとっての感謝の対象は神や家族のみならずスクルージも含み、そのことがいつも念頭にあるということだ。しかし、ボブのスクルージへの感謝は妻だけでなく子供達にとっても理解しがたいことである。語り手はクラチット家にとってスクルージがまさに嫌悪の対象であることを“Scrooge was the Ogre of the family.” (53) で端的に示す。“the Ogre” (53) と断言することで、クラチット家はスクルージを嫌うだけでなく、むしろ怖がっていることが分かる。しかし一方では、前章で指摘した通り、スクルージはどんなに小言を並べたり、嫌味を言っても、クリスマス当日だけは必ずボブに休日を与えている。普段は欲得ずくで、まさに血も涙も無いスクルージが与える唯一の休日だからこそ、ボブにとってクリスマスは何よりも貴重で、単なる休日以上の意味

を持ち、それにより有難味が一層増えるのだろう。ボブの妻は “You know he is, Robert! Nobody knows it better than you do, poor fellow!” (53) とスクルージを一番理解しているのはボブだと指摘しているが、だからこそボブは普段は冷酷なスクルージに親切さを見出し、感謝していると考えられる。

このようにボブがスクルージを非難しない理由は彼がクラチット家に幸せをもたらしていると考えているからである。ボブは、家族がどれだけスクルージを非難し、またボブ自身も彼の冷酷さを認めながらも、その中の親切さから目を背けない。それは、スクルージに対しボブが感謝しているからである。その感謝があるからこそ、ボブは自身の人間観である “fellow-passengers to the grave” (12), すなわち人間を人生の仲間と考えることに立脚し、結果としてスクルージを非難せず、また嫌うこともないのだ。

## 2.2. フレッドはなぜスクルージを避けないのか

フレッドがスクルージを嫌っていない根拠は、彼に負の感情を全く持っていないということである。彼はスクルージを “He’s a comical old fellow. . .” (57) と言い、また “I am sorry for him; I couldn’t be angry with him if I tried.” (57) と同情までしている。この言葉は現在のクリスマスの幽霊が見せるフレッド主催のクリスマスディナーの場面でのものだ。ここでフレッドの妻は “I have no patience with him. . .” (57) とスクルージを非難し、他の女性の参加者全員も同意している。しかしそのようなスクルージへの非難一色の状況でも、フレッドは “I mean to give him the same chance every year, whether he likes it or not, for I pity him.” (58) と彼を庇う姿勢を全く崩さない。このフレッドの態度は、毎年クリスマスディナーに招待しても、スクルージにただ一言 “Humbug!” (11) で拒否され、しかもクリスマス “a time for paying bills without money” (11) とまで言われることを考えれば、非常に不可解である。それにも関わらず、毎年招待するフレッドの行動は、おそらくフレッドの妻にとっては理解しがたいことであり、彼女のスクルージへの態度がむしろ当然と考えられる。このよう

に、フレッドがスクルージに負の感情を持っていないことは明らかであり、それは不思議でもある。では、フレッドはなぜそこまでスクルージを悪く思わないのか。

この疑問に対しては、次のような答えを仮説として提示することができる。フレッドはスクルージを本当は明るい人間だと本能的に考えているため無関心でいられないということだ。この仮説は、フレッドが『キャロル』で唯一のスクルージの肉親であることに基づく。フレッドはスクルージの妹ファン (Fan) の息子だ。つまり、スクルージ、ファン、フレッド三人が血縁関係にあることになる。注目すべきことに、この三人には明るい性格という共通点がある。ここでは、フレッド、ファン、スクルージに共通する明るさを指摘することで、フレッドがスクルージを肉親であるからこそ本能的に悪く思わないことを示す。

フレッドの明るさは『キャロル』の中で際立つ。語り手はフレッドの笑いを“a hearty laugh” (56) と言い、その笑いを現在のクリスマスの幽霊が気に入っていることを示す。それは、語り手がフレッドについて“*If you should happen, by any unlikely chance, to know a man more blest in a laugh than Scrooge’s nephew, all I can say is, I should like to know him too.*” (56) と言い、彼の笑いに価値を置いていることから明らかだ。そして語り手はさらにフレッドの笑いが周囲の人間を巻き込むことを“*When Scrooge’s nephew laughed in this way: holding his sides, rolling his head, and twisting his face into the most extravagant contortions: Scrooge’s niece, by marriage, laughed as heartily as he. And their assembled friends being not a bit behindhand, roared out lustily.*” (56) と示す。“holding his sides” (56), “rolling his head” (56), “twisting his face into the most extravagant contortions” (56) と笑いを全身で表し、しかも周囲の人間を笑わさずにおかないフレッドを『キャロル』で最も明るい人物と断言しても問題無いだろう。

ファンは過去のクリスマスの幽霊 (the Ghost of Christmas Past) が見せる場

面で幼い姿で登場し、その登場自体は『キャロル』全体に占める割合として非常に低い。しかし、彼女の明るさも目立つ。語り手は寄宿学校にいるスクルージを迎えに来たファンの様子を “She clapped her hands and laughed, and tried to touch his head; but being too little, laughed again. . . .” (33) と言い、再会の喜びが笑いで強調されていることを示す。このようにファンもフレッドのように笑いを全身で表すことで喜び、その様子から彼女の明るさが分かる。

スクルージの明るさは過去と現在のクリスマスの幽霊との交流で示される。そしてここで注目すべきことは、その明るさは、スクルージが過去のクリスマスの幽霊により過去に戻り、当時の自分を見た直後に過去の自分と一体化すると同時に示されるということだ。すなわち、スクルージの明るさは一見すると突如表れるようだが、実はもともと存在しており、スクルージが過去の自分と一体化するということが彼の明るさが蘇ることを意味するのである。それが顕著なのは、スクルージが当時の奉公先のフェジウィグ (old Fezziwig) が主催するクリスマスパーティーで夢中になる場面である。語り手はその様子を “During the whole of this time, Scrooge had acted like a man out of his wits. His heart and soul were in the scene, and with his former self. He corroborated everything, remembered everything, enjoyed everything, and underwent the strangest agitation.” (36) と示しているが、スクルージは “his former self” (36)、つまり過去の自分に戻り、そして “out of his wits” (36) の状態、つまり正気を失ったように夢中になってクリスマスパーティーを楽しむ。単に楽しむのではなく、正気を失ったように楽しむということはスクルージが明るい性格であることを明確に示す。現在のクリスマスの幽霊はスクルージにフレッド主催のクリスマスディナーの場面を見せるが、彼の明るさはここでも示される。スクルージは自分の姿が見えないのにも関わらず、フレッド達が行うゲームに参加し夢中になる。フレッドがスクルージへクリスマスと新年の祝福をした時のスクルージの様子を語り手は “Uncle Scrooge had imperceptibly become so gay and light of heart, that he would have pledged the unconscious company in return, and thanked

them in an inaudible speech, if the Ghost had given him time.” (60) と言うが、スクルージは “gay and light of heart” (60) となっていることから、やはりここでも彼の明るさが示されている。このように、スクルージの明るさは彼が過去の自分と一体化することにより蘇るが、その明るさが決定的に示されるのは改心後の彼の笑いである。語り手は改心後のスクルージの笑いを “Really, for a man who had been out of practice for so many years, it was a splendid laugh, a most illustrious laugh. The father of a long, long line of brilliant laughs!” (78) と言い、“a splendid laugh” (78), “a most illustrious laugh” (78), “brilliant laughs” (78) と最大限に評価している。もちろん、これはスクルージの改心後の笑いなので、過去と現在のクリスマスの幽霊と接している時の笑いとは性質が異なる。しかしその評価にスクルージの明るさが含まれることは言うまでもない。

このように、フレッド、ファン、スクルージには明るい性格という共通点がある。そしてこの共通した明るさは三人が肉親であることを特徴付ける。つまり、フレッドの明るさはファンから受け継ぎ、その明るさはスクルージからのものでもあるのだ。そのため、フレッドはけちで強欲なスクルージは後天的であり、本来は明るい人間であると本能的に考えざるを得ない。この言わば直感により、周囲の人間がどんなにスクルージを非難しようとも、フレッドは同情して庇うことで彼を避けず、まして嫌うことがないのだ。

### 2.3. 誰がスクルージの遺体にシャツを着せたのか

本章ではこれまで、ボブとフレッドに注目することで、『キャロル』の脇役全員がスクルージを嫌っているわけではないことを明らかにした。ボブとフレッドはそれぞれの立場からスクルージを評価し、それは言動や態度に表れている。次いで、彼が脇役全員に嫌われているわけではないことについて、ボブやフレッドのような特定の人間ではなく状況からも推測可能であることを明らかにする。

スクルージが完全に嫌われているわけではないことは、未来のクリスマスの

幽霊が見せる場面でも示唆されている。それはスクルージの死後、彼の遺品を彼の日雇い家政婦、洗濯女、葬儀屋が盗んで売る場面だ。そして注目すべきことに、それは彼を嫌うどころか恨んでいるとさえ思われる家政婦の言葉から示唆される。彼女は利益を得るためにスクルージの遺品の中から良質な物を選ぶ。そしてその結果、彼女は、寝台のカーテン、毛布、シャツを盗むのだが、その中でもシャツが良質であり、それをスクルージがきちんと保管していたであろうことが “. . . you may look through that shirt till your eyes ache ; but you won't find a hole in it, nor a threadbare place. It's the best he had, and a fine one too.” (69) という彼女自身の言葉で分かる。シャツに穴は開いてなく、また擦り切れてもいないこと、そしてそれが “the best he had” (69)、つまり彼が持つ最高のもので、“a fine one” (69)、しかも良質なものと断言できるのは、彼女がスクルージの家政婦だからだ。つまり、彼女は家政婦の立場でスクルージの日常生活に直接関わるからこそ、彼の身の回りを最も熟知しているのである。その家政婦の言葉にスクルージが完全に嫌われているわけではないことを示唆するものがある。ここではそれを紹介する。

スクルージが完全に嫌われているわけではないことは、家政婦の “Putting it on him to be buried in, to be sure. . . .” (69) と “Somebody was fool enough to do it. . . .” (69) の言葉から推測できる。つまり、スクルージを埋葬するために彼の遺体にシャツを着せた人間がいるのだ。そのことについて、家政婦は “to be sure” (69) と言うことで驚きを隠さず、またそれを行った人間を “fool” (69) と言い放つ。この家政婦の反応は、スクルージに接したことのある人間なら誰でも理解できるだろう。強欲で血も涙も無いスクルージの遺体にわざわざ良質なシャツを着せているのである。もちろん、スクルージが自分の死期を悟り、そのまま他人の物になるのは癪だから彼自身が着て死んだとも推測できる。しかし、スクルージは相当な蓄えがありながらも、自分のためにでさえ使わないほどけちだ。それは、スクルージは自身が風邪を引いた時でも自宅の暖炉にわずかな火しか起こさないことから明らかである<sup>3)</sup>つまり、スクルージがいくら

臨終間際でも自分から良質なシャツを着るのは不自然であり、家政婦が言うように誰かがスクルージの死後に遺体へ着せたと考えるのが妥当なのだ。このように、スクルージの死後に彼の遺体へシャツを着せた人間がいる。それは誰か。

この疑問に対する答えは、その人間を特定することは不可能であるということだ。というのも、この人間を特定するためには、スクルージの死後を時系列に沿って確認する必要がある。しかし過去や現在のクリスマスの幽霊とは異なり、未来のクリスマスの幽霊が見せる場面では、そもそも具体的な日付を特定する材料が乏しい。例えばスクルージの命日について、実業家達の一人が“Last night, I believe.” (64) と言う場面があるが、いつから見た昨晚かを実業家も語り手も言及しない。唯一の手掛かりは、他の実業家達の会話で寒さが話題にのぼった時に“Seasonable for Christmas time.” (65) と言及されることだ。しかし、これはあくまでもクリスマス季節という期間を示すものでスクルージの命日を特定する根拠とはならない。従って、スクルージの命日は不明となり、それにより彼の遺体にシャツを着せた人間を時系列に沿って特定することは不可能となる。しかし、いくらスクルージの遺体にシャツを着せた人間を特定できずとも、その人間が存在することには変わらない。重要なことは、スクルージの遺体にシャツを着せた人間が確かに存在することだ。

注目すべきことに、その人間の存在は未来のクリスマスの幽霊が見せる場面で示される。幽霊が見せる場面とは、スクルージが幽霊に“You are about to show me shadows of the things that have not happened, but will happen in the time before us...” (63) と尋ね、それが正しいと幽霊が答える様子を語り手が“The upper portion of the garment was contracted for an instant in its folds, as if the Spirit had inclined its head.” (63) と言うように、未来に起こるとされているものだ。つまり、スクルージが改心しない場合に未来に起こるであろうことを幽霊は彼に見せているのである。そのため、強欲で血も涙も無いスクルージの最期は誰にも看取られない孤独死となり、彼の遺品は家政婦を始めとする人間に盗まれる

ことになる。このように、未来のクリスマスの幽霊が見せるものは、スクルージが改心しないことを前提とした未来の場面である。それを踏まえたうえで、スクルージの遺体にシャツを着せた人間がいることの意味を考えると次のようになる。すなわち、その人間は、改心と無縁なはずの強欲で血も涙も無いスクルージの遺体にあえて良質なシャツを着せたということである。もちろん、この人間を特定できないのでシャツを着せた理由を明らかにすることは不可能である。しかし家政婦が“*He frightened every one away from him when he was alive...!*” (69) と言うように、生前全く他人を寄せ付けなかったスクルージにわざわざ良質なシャツを着せることは、彼に完全な嫌悪感を持つてはできない行為である。そのため、シャツを着せる理由を断定することはできないが、その人間がスクルージを完全に嫌っているわけではないと推測することは可能だろう。

このように、スクルージが完全に嫌われているわけではないことは、ボブやフレッドのような特定の人間だけでなく、状況からも推測できる。それは、スクルージが改心しないことを前提とした未来のクリスマスの幽霊が見せる場面で示されているからこそである。孤独死を遂げた血も涙も無いスクルージにあえて良質なシャツを着せた人間の存在は、彼が完全に嫌われていないことを示唆する重要な手掛かりとなる。

## お わ り に

本稿では、『キャロル』の主人公スクルージが本当に完全に冷酷で嫌われているのかという疑問から出発し、そうではないことを明らかにした。スクルージはその言動と態度から確かに冷酷ではあるものの、ボブへ必ず休日を与えることから完全な冷血漢とは断言できない。また同様にその振る舞いから、関わる人間にひどく嫌われてもいるが、脇役全員に嫌われているわけでもない。それは、ボブは彼特有の考えによりスクルージに感謝し、フレッドはスクルージの肉親であるがゆえに彼を悪く思わず、そして改心しない場合の未来でもスク

ルージの遺体に良質なシャツを着せる人間がいることから明らかである。一見すると『キャロル』では、改心前のスクルージが完全に冷酷な嫌われ者のイメージで統一されているが、それは誤っている。そろそろ、完全に冷酷な嫌われ者という固定観念からスクルージを解放しても良いのではないだろうか。

### 註

- 1) 改心前のスクルージが冷酷で嫌われていること自体は、作品を一読すれば誰もが認めるだろう。例えば、ポール・シュリック (Paul Schlicke) はスクルージを “the miser” (102)、ロバート・ダグラス＝フェアハースト (Robert Douglas-Fairhurst) は “mean-spirited” (ix)、マイケル・スレイター (Michael Slater) は “He is an extraordinary combination of, on the one hand, such mythic creatures as Jack Frost and child-quelling ogres and, on the other, a rusty, surly, mean-spirited old London money-dealer.” (xix) と説明している。
- 2) 原文からの引用は World’s Classics 版による。
- 3) これについては、スクルージの自宅と彼の帰宅後の様子についての語り手の説明から明らかだ。スクルージは風邪を引きながらも、暖炉を “a small fire in the grate” (18) としていることから、彼が自分のためにも蓄えを最低限しか使わないことが分かる。この点については他にも例がある。スクルージは職場の会計事務所でも自宅と同様にわずかな火しか起こさない。語り手はその様子を “Scrooge had a very small fire, but the clerk’s fire was so very much smaller that it looked like one coal.” (11) と説明している。フレッドが “His wealth is of no use to him. . . . He don’t make himself comfortable with it.” (57) というように、スクルージは蓄えがありながらもそれで楽をしたり、贅沢をしようとは考えないのだ。

### 引用文献

- Dickens, Charles. *A Christmas Carol and Other Christmas Books*. Edited by Robert Douglas-Fairhurst, Oxford UP, 2006.
- Douglas-Fairhurst, Robert. Introduction. *A Christmas Carol and Other Christmas Books*, edited by Douglas-Fairhurst, Oxford UP, 2006, pp. vii-xxix.
- Schlicke, Paul. “A Christmas Carol.” *Oxford Reader’s Companion to Dickens*, edited by Schlicke, Oxford UP, 2000, pp. 102-03.
- Slater, Michael. Introduction. *A Christmas Carol and Other Christmas Writings*, edited by Slater, Penguin, 2003, pp. xi-xxxi.